

「神の霊に従うのか、自分の霊に従うのか」

エゼキエル書 13 : 1 - 12

August.13.2023

### エゼキエル書 13 : 1 - 12 (パワポ)

#### Preface

祭司でもあり、神の言葉を取り次ぐ預言者でもあったエゼキエルに、母国イスラエルのユダ王国がバビロン帝国によって滅ぼされそうになっている正にその時、主なる神様の御手が臨み、主なる神様の御言葉が与えられました。

その与えられた御言葉の多くは、なぜ、神の民イスラエルが滅びようとしているのか、滅ぼされようとしているのかという原因と過ちについてでした。

今読みましたエゼキエル書 13 章の内容は、国が滅びた原因が、神の心や神の霊に従った御言葉を語らず、語られず、自分の心のままに、自分の霊に従って、自分の言葉や思いをあたかも神の言葉のように偽って語り、語られ、まことの平安がないにもかかわらず、「平安だ」とうそぶく偽預言者一味に成り下がってしまったイスラエル民族の偽りを、主なる神様が指摘しておられる箇所です。

耳に心地の良い話ばかりをし、人の聞きやすい話ばかりをし、世に迎合し、世の価値観や思想にへつらった結果得られた自分たちの考える良識や常識や感覚に合う話ばかりをし、神の国の朽ちることのない永遠の喜びよりも、この世のやがて消えて無くなる儂い喜びや楽しみばかりを満たすために、まことの神の言葉を語るどころか、もう既に聖書を通して語られている神の言葉に真っすぐに聞こうともせず、見ようともせず、行おうともせず、ただただ自分たちの心のままに、自分たちの霊に従った言葉や思いにぶら下がり続け、まことの神を信じていると言いながら、自分たちが作り出した神像、神観、神に対する自己満足的な理想や願望や幻影を神とし、全くもって、神さまの教えから大きく反れて行ってしまいました。

そして、反れて行った結果、イスラエルは滅びて行きました。

レビ記 25 : 18 に、

#### レビ記 25 : 18 (パワポ)

あなたがたはわたしの掟を行い、わたしの定めを守らなければならない。それを行うなら、その地に安らかに住むことができる。

と祝福が約束されていましたが、この約束に反して、神の言葉を真っすぐに聞き、見、語り、行うことがなかったために、安らかに住まうというせつかくの祝福を最後まで享受出来ずに、滅びてしまいました。

神の言葉を語る預言者が、神の霊に従わず、自分の霊と自分の思いに従って語る自分たちの言葉をあたかも神の言葉風情をして語った時、それを聞いている聴衆や会衆たちは、

「それは神の言葉ではないのではないか」と指摘出来なければならないのにも関わらず、指摘も出来ず、指摘できるだけの霊性も持たず、指摘出来るだけの御言葉も蓄えられておらず、耳障りの良い言葉や慰めや癒しや励ましばかりを聞きながら、「それでいいのだ」と言うような雰囲気、神の教会イスラエルに蔓延っていました。

## Part One

新約聖書使徒の働き 18 章には、アポロという情熱に満ちた伝道者の語るメッセージを聞き、その足りていない部分を指摘し、補ってあげるプリスキラとアキラという平信徒の夫婦が登場してきますが、エゼキエル書当時のイスラエルには、間違っただ話をしている預言者を注意指摘してあげられるプリスキラとアキラ人がいなかったようです。

早天祈祷会や水曜礼拝では以前お話ししたことがあります、私が学んだ神学校に、週に一度講義をしに来て下さる著名な牧師先生がいらっしゃいました。

6000人以上の方々が、毎週日曜日の礼拝に出席する大きな教会の主任牧師でした。その方の著書は200冊以上出版されており、私もその先生の授業や説教から感銘を受け学ぶことが多かったので、その先生の本を150冊近く買い集めました。

そんな先生のとある授業の中でお話しされた、今でも忘れることが出来ない印象深く残っている話があります。

その先生が牧会している教会は大きな教会ですので、副牧師の方々もたくさんおられ、その副牧師の方々が何年かしますと教会の副牧師を辞し、新しく教会開拓に行かれるんだそうです。

そして開拓した教会の開会礼拝に、この牧師先生が招かれて説教をされるのですが、その説教の内容が全部一緒だと言うのです。

どういう説教かと言いますと、こういう説教なんだそうです。

「(講壇から会衆に向かって) 皆さん、皆さんに私から一つお願いしたいことがございます。

皆さんが、来週からこの教会の主日礼拝にいらっしゃる時、手の平に収まる程度の石で構いませんので、その石を握り締めて礼拝にご出席下さい。

そして、礼拝の中で語られるこの牧師の説教が(つまり元副牧師の説教が)、聖書の話ではなく、神の御言葉でないならば、躊躇なさらずに、その石をこの牧師の顔目掛けて投げつけてやって下さい。

それが、これからこの教会を建て上げていく皆さんの大切な働きであり、奉仕であり、役割です。」

この話を聞いていた私たち神学生は、緊張で固まりました。

聖書の言葉風情を、神の言葉風情を語っている牧師が少なくなると、聖書の言葉風情を、神の言葉風情を聞いている信徒たちも少なくなるということを、先生は日頃から憂慮され、その憂慮の思いを口酸っぱく、時には声を荒げながら語っておられました。

なのでもし、「本当に聖書がそんなことを言っているのか」と、「神の言葉ではない言葉を語っている」と思われましたら、私にも石を投げつけてやって下さい。

(石を投げられることを想像するだけでも、色々な意味で怖い気が致します)

エゼキエルの時代のイスラエルには、長い間、石を投げつけることの出来るような骨のある人が居なかったようです。

もっと正確に言いますと、居たけれども、その人たちを抹殺してきました。  
アモス書2：12に行ってみましょう。

### アモス書2：12 (パワポ)

主にその身を献げ献身したために、強い酒や葡萄酒どころか、干し葡萄や葡萄の実さえも口にしなかったナジル人と言われる献身者たちに、酒を飲ませて酔っぱらわせ、墮落させ、神の言葉を語る預言者たちには、「まともに神の言葉を、聖書の言葉を語ってくれるな！」と迫りながら迫害し、抹殺しました。

神の言葉を神の言葉として、まともに全うに語ろうとする者たちに、「そんな耳の痛い言葉を語ってくれるな！ そんな耳の痛い厳しい言葉が神の言葉であるはずが無かろう！ もっと、繁栄とか成功とか喜びとか楽しみとか癒しとか慰めとか励ましとか、もっと気持ちのいいこと、気分のいいこと、もっと差し障りのないことを語りなさい！ そういう話こそ、宗教が宗教たる所以であり、信じる甲斐があり、報いがあり、値打があり、私たちの需要と要求を満たす供給だろ！」と、まことの神を信頼し御言葉を生きることを、人間が作り出した宗教や偶像崇拜や経済産業的需要と供給の原理や思考に引き下げてしまいました。

世に迎合しへつらう、目の前の安楽のために永遠の称賛と栄光と誉れを犠牲にする、骨抜きのためのコミュニティーに成り下がったのが、エゼキエル書の時代のイスラエルでした。

## Part Two

では翻って、私たち日本のキリスト教会、日本のクリスチャンたち、日本の牧師や信徒やキリストの群れはどうでしょうか？

出来るだけ波風を立てないように、出来るだけ世の中から認められ、出来るだけ変な目で見られないように、変なことは言わず、誰もが「それならば受け入れられる」という言葉ばかりを語り、そんな雰囲気を作り醸し出し、職場や学校や地域でも一切の迫害も受けずに受け入れられ、人々や地域に認められることばかりを最優先し、地域の神社やお寺主催の祭りにも何の意識もなしに集い手伝い、氏子や檀家ではないけれども、あたかも氏子や檀家であるかのように町内会費と称すお布施のようなものも何の気なしにし、天皇一家の映像や話を聞くと何だか心が和み、国の政治や経済や行政については熱弁を振るいながら、クリスチャンであることよりも日本の民族・日本人であることを先ず優先し、「色んなところで文化や風土や風俗に合わせていくことをもって信仰を表す、キリスト者であることを表わす」と言いながら、いつのまにか、士師記や列王記や歴代誌に書いてあるようなこれはこれ、それはそれというまことの神を信じる以外のいけにえを献げる高台を、自

らの日々の暮らしの中に作っていることになっているかもしれないということにも気付かずに、または知らないふりをしているのかもしれない...

厳しい言葉でしょうか。

先鋭的な極端な言葉でしょうか。

土浦めぐみ教会には、似つかわしくない言葉でしょうか。

私が、私の意見を勝手に述べているだけでしょか。

もちろん、私は毎日罪を犯す本当に罪深い罪人ですし、主イエス様の哀れみと赦しなしには息をすることも出来ない塵のような存在なので、私の意見を自分勝手に語っている感を100%拭い去ることは出来ません。

でもしかし、聖書を読みますと、また、第二次世界大戦を引き起こした日本における80年前の日本の教会の姿を顧みたま時、厳しいと思われることを口にせずにはられませんし、あながち間違っていないと思えてしまいます。

いやむしろ、「これを語らずして何を語る。これを語る覚悟が無いならば、牧師を辞めなくちゃ」とまで思えてしまいます。

「自分の心のままに、自分の霊に従って語るよりも、神の御心を慕い、神の霊に従って、神の言葉を語りたいという覚悟と思いはいつでも持っていたい」と、「持っていなければ」と日々格闘しております。

エゼキエル書13章の御言葉をもう一度お読みいたします。

### エゼキエル書13：1－12（パワポ）

#### Part Three

今日は敗戦記念礼拝です。

土浦めぐみ教会では毎年、敗戦記念礼拝を献げております。

なぜならば、このエゼキエル書13章の御言葉に書かれている通りの過ちを、戦中、私たち日本のキリスト教会が犯してしまったことを忘れることなく思い返すためです。

遠い昔の話で私たちには関係のない話ではなく、正しく、現代に生きる私たち日本のクリスチャンたちにも同じように突き付けられている問題であることを覚えるために、敗戦記念礼拝を献げております。

土浦めぐみ教会だけでなく、土浦めぐみ教会が所属しています日本同盟基督教団でも、「戦中の過ちを二度と犯すまい」と、毎年平和祈祷会を持ってありますが、各個教会のレベルでは、どれくらいの教会が敗戦記念礼拝のようなひと時を持っておられるのかは分かりません。

戦後、各キリスト教団によって、戦中の過ちについての謝罪文などが作成されはしたものの、戦時中の教会の過ちを日本のキリスト教会全体の、クリスチャン一人一人の問題として認識し、悔い改めたとは言いがたいというのが実際のところではないでしょうか。

10年ちょっと前になりますが、民主党政権から自民政権に戻った時、突如として教

会のメールアドレスに、天皇崇拝や神社参拝の正当性を訴えるクリスチャンと称する方々からの定期便メールのようなものが届き始めたことがあり、ショックを受けたことを覚えております。

日本同盟基督教団では、設立100周年記念の時、80年前の私たち日本のキリスト教会の過ちを省み覚えるために、このような宣言がなされました。

(パワポ)

日本同盟基督教団は、太平洋戦争時に、国家神道体制の下で教会の自律性を失い、国策に協力しました。とりわけアジア諸国と、その教会に不当な苦しみを負わせました。その罪を認め、ここに悔い改め、教会のかしらであるイエス・キリストこそ、唯一の主権者であることを告白します。

続いて、105周年記念の時には、さらに突っ込んだ内容の宣言がなされました。

(パワポ)

戦時下には、「宗教団体法」の実施に伴い、「日本基督教団」(1941年・昭和16年)設立時に、第八部に合同しました。戦後、その一部の教会は日本基督教団離脱を決意し、新たに「日本同盟基督教団」(1949年・昭和24年)を結成しました。

かえりみて、戦時下、特に「昭和15年戦争(1931-1945年)」の間、私たちの教団は、天皇を現人神(あらひとがみ)とする国家神道を偶像問題として拒否できず、かえって国民儀礼として受け入れ、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」・「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない」との十戒の第一戒と第二戒を守り抜くことができませんでした。さらに近隣諸国の諸教会と積極的に平和をつくり出す者として生きることができず、国家が推進した植民地支配や侵略戦争に加担し、アジア地域の侵略に協力しました。こうして神と隣人の前に、とりわけアジアの人々に、偶像礼拝の強要と侵略の罪を犯し、しかも戦後、この事実気付かず、悔い改めに至ることもなく、無自覚なままその大半を過ごしました。

近代日本の100年余の歴史に重なる私たちの教団の歴史をかえりみ、私たち教職・信徒は、「信仰と生活の唯一絶対の規範」である神のみことばに、十分聞き従い続けることができなかつたことを主のみ前に告白し、悔い改め、神と隣人との心から赦しをこい求めます。私たちは、今、あらためて、堅く聖書信仰の原理に立ち、聖霊の助けにより、福音にふさわしい内実を伴ったキリストの教会へと変革されることを心から願います。

#### Part Four

戦中、日本のキリスト教会は、天皇崇拝は宗教ではないという天皇崇拝の非宗教化を宣言しただけでなく、神社参拝も偶像崇拝ではないと国民儀礼として規定し、受け入れていきました。

日曜日の主日礼拝においては、天皇を褒めたたえる君が代を斉唱し、天皇に対する忠誠を表す皇居の方角に向いて宮城遥拝を行ったり、また、申命記やヨシュア記の聖書の言葉を

を引用しながら、朝鮮伝道論と銘打って、「朝鮮半島は神様が日本に下さった約束の地であるがために、その地を手に入れるために力を尽くし、大日本帝国政府に協力することは神様の御旨を成すことであり、地坼を広げて下さる絶好の機会である」と主張しながら、日本の教会は朝鮮半島に牧師を派遣して、朝鮮半島のクリスチャンたちに天皇崇拜と神社参拝を説得し、強要することを牧師たち自ら進んで主導しました。

正に、暴虐無道な不義に満ちた状態でありました。

無論、そんな中にあっても、キリスト再臨信仰が、天皇を現人神とする当時の国体に反すると、治安維持法によってホーリネス系教会の牧師100人余りが一斉に検挙され、その内6名が獄死し、1名が釈放後まもなく死亡したことや、ピューリタン信仰に立脚した信仰共同体である美濃ミッションや上智大学の学生や志しある牧師やクリスチャンによる神社参拝拒否という信仰的反旗を翻した方々もおられました。天皇崇拜や神社参拝は聖書の教えに反していないどころか、聖書の教えに従った先祖を敬い、国を愛し、文化風習を尊ぶ信仰的行為であると、ほとんどのキリスト教会が受容していきました。

もちろん、そうせざるを得なかったという私たち誰もが持つ弱さや、その痛みや、そんな状況を生きなけなければならない当時の教会やクリスチャンたちに同情せずに、私たち自身のことを棚に上げて、軽率に断罪などしてはならないということは重々承知しなければなりません。

ですが、それを踏まえてもなお、日本のキリスト教会が、戦中の国家政策に熱中し、霊的視野を自ら閉ざしていたという事を日本の敗戦と共に露呈したという事実は、現代に生きる日本のクリスチャンとして、私事として受け止めて行かなければならない深刻な問題でもあると思います。

以前、2年半程掛けてダニエル書を学びましたが、ダニエル書には、このようなダニエルの祈りが記されております。

### ダニエル書9：5－19（パワポ）

このダニエルの祈りは、私たちの祈りともならなければならないでしょう。

ダニエルは、イスラエルが滅び捕囚となって捕らえられて行った先、異邦の国で、異邦の宗教や異邦の文化の中で、神の言葉を全うに生きようと命を懸けて生涯努めた人でした。

そんなダニエルが、「**私たちは、罪ある者で不義をなし、悪を行って逆らい、あなたの命令と定めから外れました**」と、その場にいなかったにもかかわらず、あたかもその場に自分もいたかのように、「**私たち**」と告白しながら、自分をもそこに含めて祈りながら、信仰の先達たちの祖先たちの罪を我がものとして祈りました。

そして、自分たちに降りかかったのろいとわざわいと滅びは、神のせいではなく、100%自分たちのせいだと、自分たちの咎のためだと、自分たちが神の言葉を生きなかったためだと告白します。

このようなダニエルのような人の登場を、神さまは預言者エゼキエルを通して、既に予

見せていて下さいました。

## エゼキエル書 6：8－10（パワポ）

イスラエルの滅びの中であって、命辛々、捕囚の民として諸国に追い散らされて行き、残され、まことの神から離れた彼らの姦淫の心と、偶像を慕う彼らの姦淫の目に、主なる神様がどんなに傷ついたかを思い起こし、祈り、悔い改め、改めて神の言葉を生きる者として立てられた人たちのうちの代表的な一人が、ダニエルでした。

### Part Five

では、私たちはどうでしょうか？

戦後、残されたものとしての役割を果たしているでしょうか？

ダニエルのような祈りが、我が祈りでしょうか？

ダニエルの生き方が、生き様が、私たちの生き方で生き様でしょうか？

赤羽聖書教会の野寺博文牧師先生が、その著書や投稿の中でこのようなことを仰ったことがあります。

「敗戦後 70 年間の日本の教会の足跡は、罪の裁きの下にあり、神様は日本の教会にリバイバルをお赦しにならなかった。なぜならば、日本の教会は大日本帝国時代、偶像崇拜と戦争協力の罪を犯し、敗戦後も悔い改めがなされることもなく、多くの時間が過ぎてしまったからである。それゆえに、イスラエル・ユダヤ民族と同様に、日本の教会は捕囚の民としてリバイバルを経験できなかつた戦後 70 年を過ごしてきた。

最近特に思うことは、日本のキリスト教会が今日、天皇制の呪いの束縛からどれほどに克服しているかということである。今時、どれほどの牧師が、天皇制の持つ問題をはっきりと講壇から説教出来ているだろうか。日の丸・君が代問題の深刻性を、牧師はまともに信徒に教えているだろうか。役員や信徒たちの反対を恐れて真理を説教することが出来ずにいるのではないだろうか。白黒はっきりさせることのない説教しか出来ていないのではないか。戦時中、一度敗北した日本の教会は、現在に至るまで世の中と摩擦を起こさないために、迫害を受けないために、かろうじて何とか延命している負け犬根性が、未だに抜けきっていないのではないだろうか。

このような体質を根本から変えなければ、教会は戦後 100 年過ぎても、世の中にキリストの栄光を表すことは出来ないだろう。世の中は急激に右傾化している。このような時代に真理を語るならば、当然厳しい迫害を受けるだろうし、人間扱いを受けないこともあるだろうし、死ぬかもしれないという覚悟を持たなければならないだろう。だからと言って、世の中に迎合することは、戦時中の教会と同じことを反復してしまうだろう。悪しき時代であるがために、なおいっそう教会は、世の常識や評判に揺るがされるのではなく、神の国について語っている聖書から、世の状態を正確に判断しなければならない。」

現代のダニエル、現代のエゼキエルなる、神がお立てになった預言者としての言葉ではないだろうかと思わされます。

では、私たちは、この現代の預言者の言葉にどう反応しますか？

どう応えますか？  
どう変わりますか？  
どう生きますか？

主イエス様もこのようなことを仰いました。

### マタイの福音書 10 : 26 - 42 (パウロ)

私たち土浦めぐみ教会の中に、日本のキリスト教会の中に、日本のキリスト者の中に、このイエス様の御言葉が生きて働き、尊重されているでしょうか？

このイエス様の御言葉を混じり気なしに、真っすぐに語る預言者たる牧師がいますか？

このイエス様の御言葉を慕い求めるキリスト者がいますか？

自らを罪人だと公言し、でもそれ以上にキリストの贖いによって罪許された幸いな者だと公言し、罪赦された者として、社会で、地域で、職場で、学校で、家庭で、虚勢と空威張りとかけおどしの偽りに巻き込まれることを拒み、世の光として地の塩として生きようと、人々の前でキリストを認めることに命を懸けているキリスト者がいますか？

イエス様がなそうとしておられる平和は、この世においても社会的平和や和平や和解が最終的には伴うようになりませんが、その過程においてキリスト者が経験する、通る、通らされる歩みは、必ずしも、一般論的な、ヒューマニズム的な、人本主義的な、経済科学産業主義的な平和ではなく、剣と敵意と迫害と血が大なり小なり伴うことでしょう。

でも、それは致し方ないことです。

なぜならば、世は罪の中にあり、サタンは、神なるお方の全き善と義を否定し、拒むものだからです。

それでも、私たちキリスト者は知っています。

何を？

キリストこそ平和であることをです。

人は何だかんだと言いますが、結局、人間誰もが求めている平和は、キリストのみにあり、キリストのみが提供できる、与えることの出来る、備えておられるまことの平和です。

キリストにこそ、究極的な平和があります。

今、私たちが学んでいるエペソ書でも、使徒パウロ先生が「キリストこそ平和です」と告白されながら、ヒューマニズム的有限な限界のある平和のためではなく、キリストにあるまことの平和のために、迫害や試練を生き、その中でこそ、生き生きと平和なるキリストを体験しながら、天の御国へと凱旋して行かれました。

ご自分と一緒に十字架に架けられた囚人に向かって、イエス様が、「わたしを慕うあなたは、もう既に、わたしとともにパラダイスにいます」という平和、試練や苦難や痛みを超えた、または、キリストゆえの試練や苦難や痛みならばなおさらに明確に実感する、唯一平和と呼べる平和が、キリストにある平和です。



## Conclusion

最後に、同盟教団の「教会と国家」委員会より出された、まことの平和を願い求める祈祷課題をお読みいたします。

(パワポ)

1. 私たちの教団が、過去に犯した偶像礼拝と侵略戦争への加担という罪を心に刻み、二度とその罪を繰り返すことなく、また、私たちの国が侵略し、蹂躪し、偶像礼拝を強要した国々の人々に対して心からの和解を求めていくことができるように。

2. 福音主義に立つキリスト教会として、伝道と社会的政治的参与をキリスト者のつとめとし、この世にあって積極的に社会的責任を果たして行くことができるように。教会が、苦しみを抱える人々に仕える奉仕(ディアコニア)の働きをも実践し、キリストを証しすることができるように。

3. この国の為政者が、公義と正義に基づく政治を行うことができるように。主権在民、基本的人権の尊重、平和主義の原則を後退させる、憲法改正発議がなされないように。また、私たちが、国家に対して「見張り人」として立てられていることを自覚し、主に代わって国家に警告を与え続け、神の国の拡大のために、私たちに与えられた宣教の使命を果たして行くことができるように。

4. 「日の丸・君が代」強制問題で戦っている方々の信仰の自由が守られ、この国に住む在日の方々や外国籍の方々を、私たちの隣人として自分自身のように愛し、基地の押し付けに苦しむ沖縄の方々の痛みに寄り添うことができるように。

5. 8月6日広島原爆の日、8月9日長崎原爆の日を覚えて。そして、福島第一原発事故の被災者の方々のために。核兵器禁止条約に、日本も参加することができるように(2021年1月、条約発効に必要な50ヶ国の批准に達し、発行された。今年1月9日時点で署名国92か国、批准国68か国)。

6. 昨年2月24日に開始されたロシアのウクライナ侵攻が、一刻も早く終結へと至るように。ウクライナ難民への支援活動を担うキリスト者のために。私たちも世界の教会の一員として世界宣教の視点を持ちつつ、そのような働きを覚えて祈り支えていくことができるように。

7. 貧困や抑圧や差別といった社会構造的な暴力のない真の平和をも願い求め、そのために教会が用いられるように。世界各国で自由や平和のために戦う人々を覚え、連帯できるように。

イエス・キリストを信じるということは最高の幸いであり、最高の喜びであり、この上ない究極的な祝福・恵みであります。聖書が私たちに教えている信仰は、思ったより甘

つちよろいものではありません。

覚悟が求められますし、命まで求められていますし、また命に値するどころか、この塵に過ぎない朽ち果てていく肉体や精神とは比較にならないぐらいの報いと報酬があることが約束されています。

覚悟を決め、命さえも惜しくないと、主の恵みによって、聖霊の満たしによって思えたならば、それに勝る幸いはないと、時に適って、その時々、苦しい時でも嬉しい時でも、ホッとする時でも辛い時でも、暑い時でも寒い時でも、時に適って、「これに勝る祝福はない」と思えるのが、キリストを信じる信仰です。

キリストを信じ抜きましょう。

お祈りいたします。

主よ、キリストのみを信じ抜かせて下さい。

キリストのみを、我が平和と出来ますように。

キリストのみを誇り、キリストのみを頼り、キリストのみを仰ぎ見させて下さい。

そして、キリストの心を、我が心として下さい。

平和であられる救い主、イエス・キリストの御名によって、お祈りいたします。